鳥取東原遺跡

鳥取町現道拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1997

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

粕川村出土文化財管理センター
11.2.16
第 1742 号
収 受

粕川村出土文化財管理センター

鳥取東原遺跡

鳥取町現道拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1997

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

はじめに

赤城山の裾野が緩やかに南に伸び、藤沢川が浅い谷を造りながら桃木川に流れ込んでいます。広い台地は緩やかな起伏を持ち、豊かな耕地を造っています。

台地上には多くの古墳や住居址が発見されており、付近には奈良・平安時代の大集落地が散在しています。

そんな中を現道路の拡幅工事が計画され、それに先立つ発掘調査が行われました。当初は奈良・平安時代の遺跡を予想し調査しましたが、結果的には5世紀後半の鋸歯文を持つ坏を伴う住居址1軒、江戸時代の前期と推定される墓坑を含め7基の土坑の調査が行われました。

5世紀後半の鋸歯文を持つ坏の発見は、県内でも類例が少なく中期古墳との関係や古墳時代の集落の範囲を表す資料となると思います。

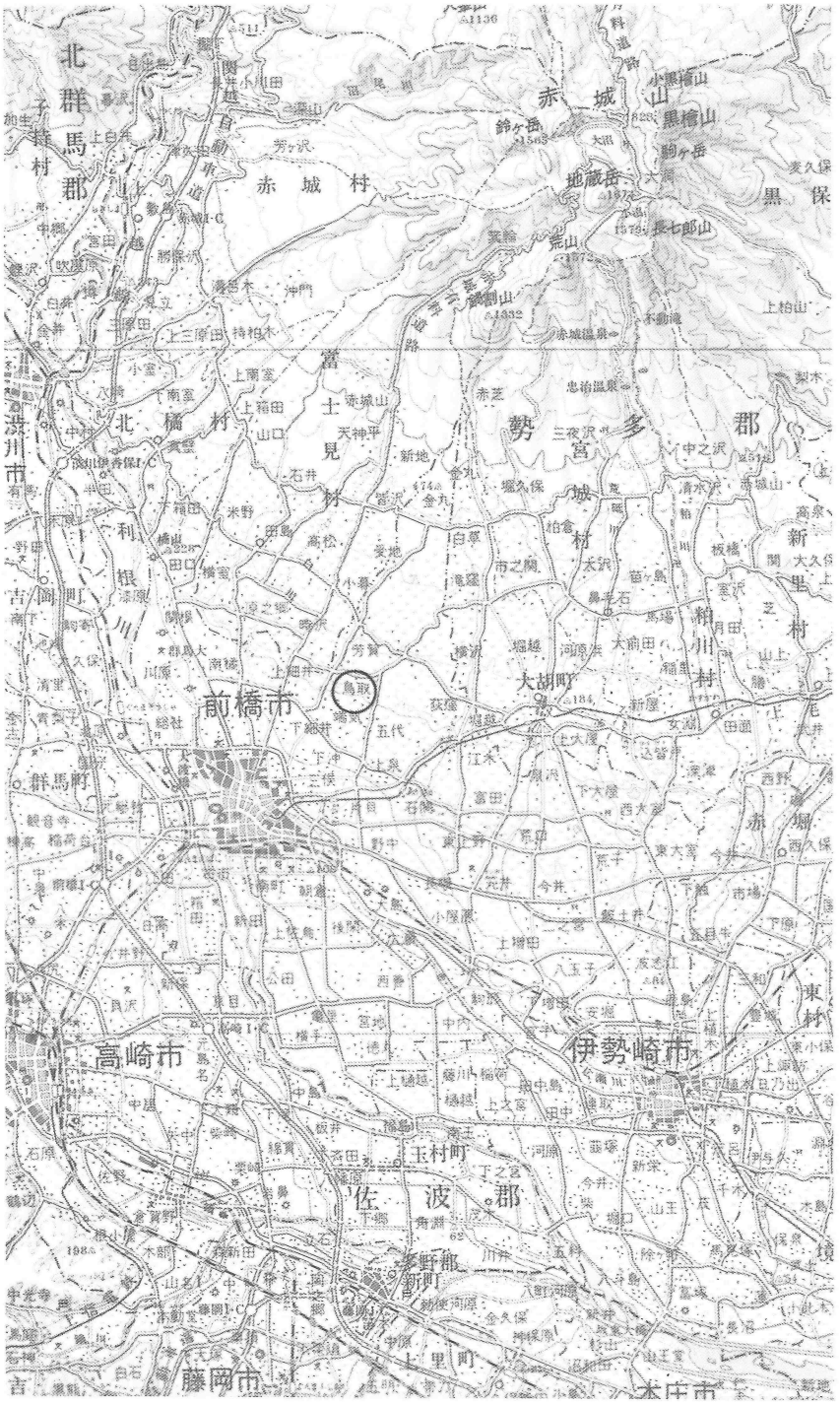
7基の土坑も副葬された貨幣の種類や数も含め、江戸時代の庶民の葬制の解明の一助となる資料となると考えています。

道路の拡張という狭い範囲での調査であり、全貌を解明するまではいきませんでした。地味な成果ではありますが、この地に新たな資料を一つ増加することが出来たと思っています。ご一読いただきまして、ご指導、ご鞭撻をいただければ幸いと存じます。

平成10年3月31日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長　中西誠一



1：200,000

0　5　10　15　20　キロメートル

Fig. 1　位　置　図

目　　次

はじめに
例　　言
本　　文
Ⅰ 調査に至る経緯 …… 3
Ⅱ 遺跡の位置と環境 …… 3
Ⅲ 発掘調査の方法と経過 …… 5
Ⅳ 基本層序 …… 6
Ⅴ 遺構と遺物 …… 7
Ⅵ まとめ …… 8

挿　　図
Fig. 1 位置図 …… 1
Fig. 2 鳥取東原遺跡周辺図 …… 4
Fig. 3 発掘区位置図 …… 6
Fig. 4 基本土層図 …… 6
Fig. 5 調査区全体図 …… 11
Fig. 6 調査区C区 …… 12
Fig. 7 調査区F区 …… 13
Fig. 8 H－1号住居址・土坑 …… 14
Fig. 9 B調査区・土層図 …… 15
Fig. 10 H－1号住居址・D－3出土の古銭・土器 …… 16

写　　真
PL. 1 F区深堀、H－1号住居址、B・D・E区全景
PL. 2 D－3、調査前、F区全景

表
頁
Tab. 1 住居址一覧表 …… 7
Tab. 2 土坑一覧表 …… 7
Tab. 3 遺物観察表 …… 7

抄　　録

例　　言

1．本報告書は、鳥取町現道拡幅工事に伴う鳥取東原遺跡発掘調査報告書である。

2．本遺跡の略称は9C15である。

3．調査主体は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団である。

4．発掘調査の要項は次のとおりである。

調査場所	群馬県前橋市鳥取町613番地－1他
発掘調査期間	平成9年7月10日～平成9年7月31日
整理・報告書作成期間	平成10年1月6日～平成10年3月31日
発掘・整理担当者	坂口　好孝・眞塩　明男（前橋市埋蔵文化財発掘調査団調査係）

5．本書の原稿執筆・編集は坂口・眞塩が行った。

6．発掘調査・整理作業にかかわった方々は次のとおりである。（順不同）

赤石　忠彦　　石原　義夫　　岩木　　操　　岸　フクエ　　渡木　秋子　　湯浅たま江　　湯浅　道子

Ⅰ　調査に至る経緯

鳥取東原遺跡は、鳥取町現道拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、平成９年７月に実施された。発掘調査に至る経緯は以下のとおりである。

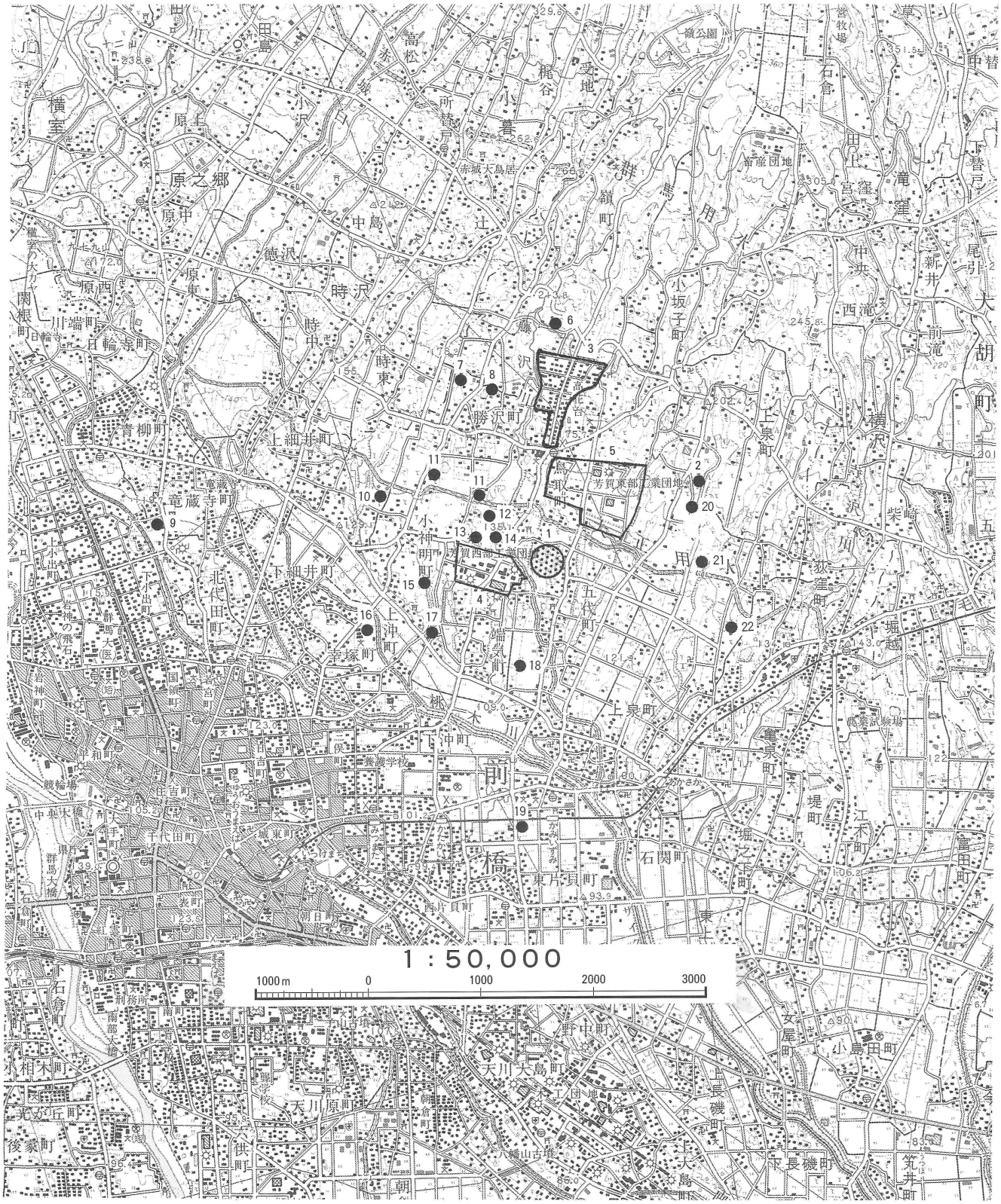
本遺跡の発掘調査は、前橋市鳥取町内の市道の拡幅・改良を行い、車両通行の円滑化と歩行者等の安全を図るための工事に伴い行われた。平成９年５月19日付で前橋市長萩原弥惣治より鳥取町地内の現道拡幅工事に伴う埋蔵文化財試掘調査依頼が前橋市教育委員会に提出された。これを受け、前橋市教育委員会文化財保護課が組織する前橋市埋蔵文化財発掘調査団との間で協議・調整を行い、平成９年７月10日、両者の間で本発掘調査の委託契約を締結、７月11日、現地での発掘調査を開始するに至った。実施方法は、平成元年４月３日付締結の前橋工業団地造成組合と前橋市埋蔵文化財発掘調査団が取り交わした埋蔵文化財に関する覚書に準拠する。遺跡名称は『鳥取東原遺跡』とし、遺跡略称は９Ｃ15とした。なお、遺跡名称の『東原』は旧地籍の小字名を採用している。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

鳥取東原遺跡は、前橋市街地から北東へ約4.5㎞の鳥取町613番地1他に所在する。遺跡地の前橋市鳥取町は、昭和29年に前橋市に合併されたもので、それまでは勢多郡芳賀村字鳥取であった。旧芳賀村は赤城南麓にあって、南北に細長い三角形状を呈している。頂点に当たる北端は標高620ｍ、底辺に当たる南端は旧利根川の河川敷とされる沖積地で、その標高は110ｍ、平均斜度は約５／100である。本遺跡地は、赤城火山斜面と呼ばれる赤城山の裾野に属する傾斜地上にある。赤城火山斜面は台地上の地形であり、ところどころの山麓に源を発する中小の河川が南流し部分的に開析谷を形成している。したがって舌状台地上では水に乏しく、主に桑畑等が広がり、小河川により形成された谷地は、狭隘ではあるが水田が営まれている。そして、この斜面の末端部は比高差10ｍ前後の直線的な段丘崖をなしており、旧利根川のつくった広瀬川低地に接している。本遺跡から南へ約１㎞下った県道前橋今井線付近（端気町）がこれに当たり、ここから南に関東平野が広がっている。

本遺跡の北東約300ｍには芳賀東部工業団地が、南西約400ｍに芳賀西部工業団地があり、北約200ｍには大正用水が東西に流れ、赤城南麓斜面一帯の農業用水として広く利用されている。

本遺跡周辺域は、台地部を中心に遺跡の濃密分布地域で、市内でも大規模な芳賀北部・西部・東部団地遺跡が指呼の間にあり、縄文・古墳・歴史時代の遺構を多数検出した。また、奈良三彩小壺を出土した檜峯遺跡、中・近世の嶺城跡なども含んでおり、古くから人々の生活の舞台となってきた地域であることが知れる。



1．　鳥取東原遺跡
2．　五代桧峯Ⅱ遺跡
3．　芳賀北部団地遺跡
4．　芳賀西部団地遺跡
5．　芳賀東部団地遺跡
6．　東公団古墳
7．　オブ塚西古墳
8．　オブ塚古墳
9．　青柳寄居遺跡
10．　南田之口遺跡
11．　小明神遺跡群（２カ所）
12．　九 料 遺 跡
13．　倉 本 遺 跡
14．　西 田 遺 跡
15．　大明神遺跡
16．　西新井遺跡
17．　端気遺跡群Ⅰ・Ⅱ
18．　大日塚古墳
19．　茶木田遺跡
20．　檜 峯 遺 跡
21．　檜 峯 古 墳
22．　新田塚古墳

Fig. 2　鳥取東原遺跡周辺図

Ⅲ　発掘調査の方法と経過

1　方　　法

委託された調査箇所は、総面積約690㎡の現道拡幅部分である。東西に細長い調査区なので、東側からＡ区、Ｂ区、Ｃ区、・・・、Ｉ区とした。グリッドについては、４ｍピッチで西から東へＸ１、Ｘ２、Ｘ３・・・Ｘ15で表し、北から南へＹ１、Ｙ２、Ｙ３・・・Ｙ15、と番付けし、グリッドの呼称は北西杭の名称を使用した。なお、Ｘ10・Ｙ10の国家座標は、第Ⅸ系のＸ＝46,060ｍ、Ｙ＝－64,860ｍである。また調査は表土掘削・遺構確認・杭打ち・遺構掘り下げ・遺構精査・全景写真・遺跡全体測量の順に行った。図面作成は平板・簡易遣り方測量で行い、主要な遺構の断面等はスケール１／20で、遺構全体図はスケール１／40で作成した。

2　経　　過

発掘調査は、平成９年７月11日、重機により調査区内の表土の掘削開始。Ａ・Ｇ・Ｈ・Ｉ区（Fig.　５参照）は現存の住宅やブロック塀、水田などがあり、Ｂ・Ｅ区は暗渠排水土管が埋設されており、Ｄ区では地下水が湧出した。また、地層のセクションからも谷地の様相を呈しており遺構確認なしと判断した。結果、Ｃ・Ｆ区だけの調査となり、調査面積も予定の１／４程度になった。14日、表土の掘削を終了。現道のすぐ脇で調査をするため、調査区の道路側に事故防止のために安全対策の柵を設置した。15日、表土掘削に追従してプラン確認を行い、調査の結果、住居址１軒、土坑７基が検出された。16日、杭打ちを終了、Ｃ区の土坑Ｄ－３から人骨が出土した。住居址に関しては南側部分の大半が調査区外のため範囲不明であり、遺構面から床面まで10㎝弱と非常に浅く残存状況の悪い竪穴住居であった。しかし、弱い外稜と口縁外側に鋸歯文を持つ高坏、内斜口縁を持つ坏を検出した。18日、Ｄ－３の調査を続け古銭、棺桶に使ったと思われる釘、漆の破片、土師質皿型土器、磁器小皿などが出土し、江戸時代の埋葬施設と判明した。人骨については、地元と協議の結果、芳賀地区にある善勝寺に無縁仏として弔う措置をとった。その後、調査を順調に進め、22日には７基の土坑調査を完了。７月30日に発掘調査の全工程を終了した。また、Ａ・Ｇ・Ｈ・Ｉ区の調査は後日の道路工事の際に立ち会ったが、遺構を確認することができなかった。

全調査を通して現道の狭さや交通量の多さなどに気を配りながら危険・事故のないように配慮しながらの作業であった。また、江戸時代の埋葬施設以外完掘できた遺構がなく、土器等の遺物も少なかった。

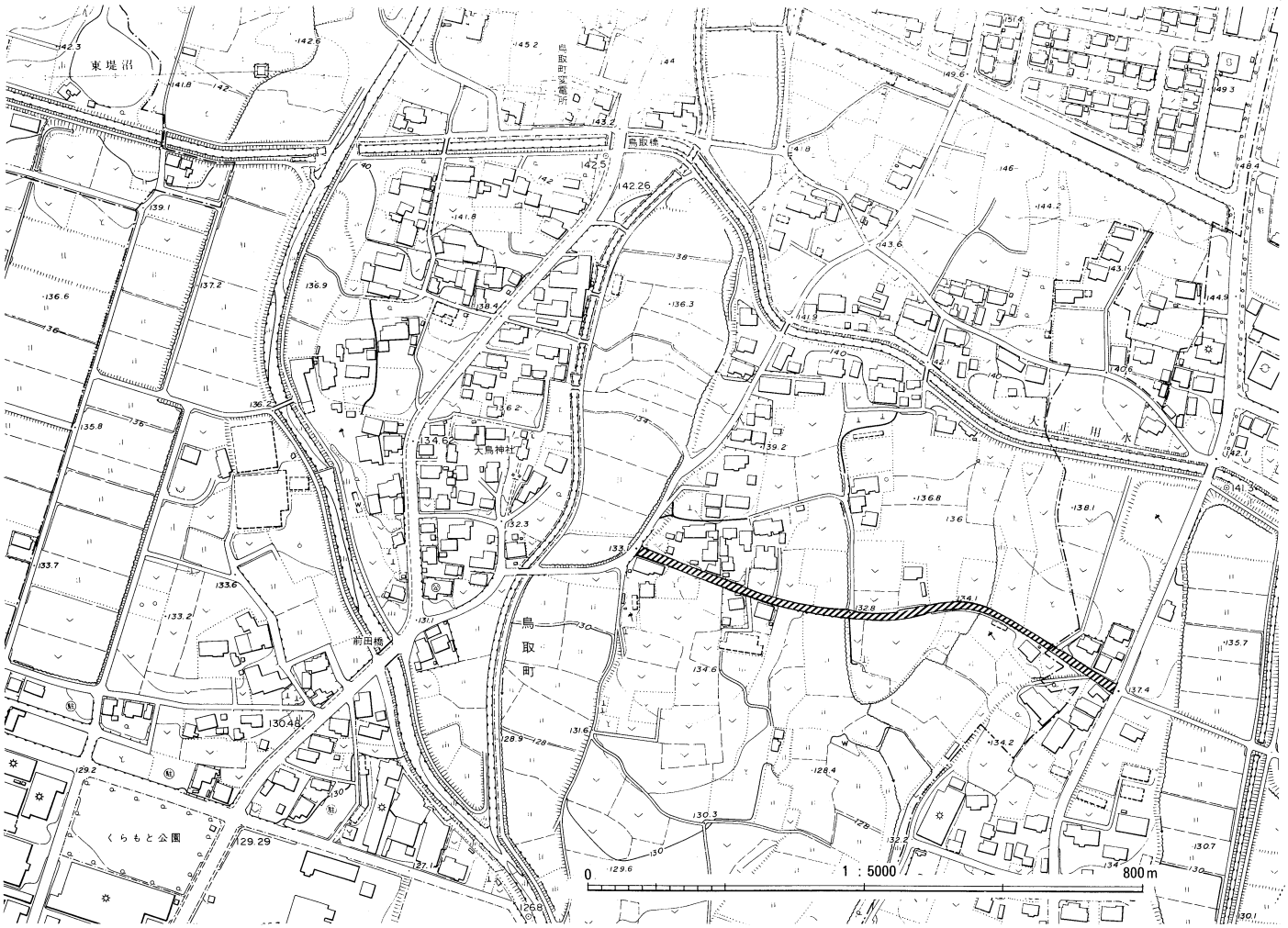
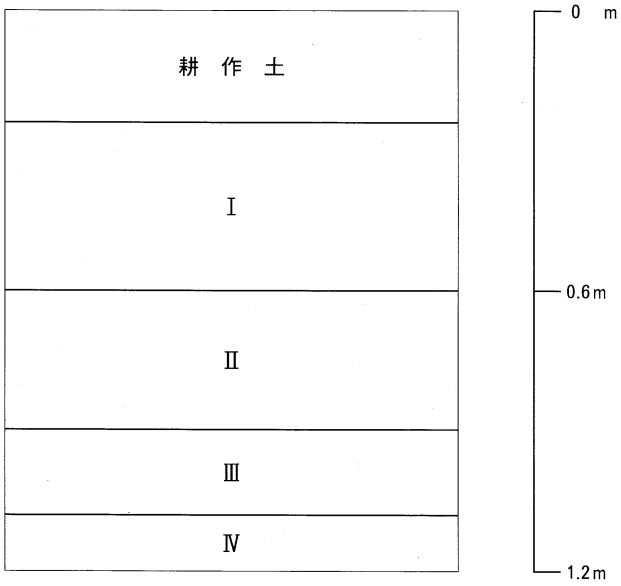


Fig. 3　発掘区位置図

Ⅳ　基　本　層　序

本遺跡地内の地層の堆積はFig. 4のとおりである。



耕作土。20～30cm

Ⅰ層　暗褐色土層。F軽石(Hr－FP、Hr－FAの識別は不可能)を少量含む。耕作土も交じる。ローム漸移層。30～40cm

Ⅱ層　褐色ローム層(1)。Hr－FP、As－Cを含む。20～30cm

Ⅲ層　褐色ローム層(2)。Ⅱ層より一段ときめが細かく、粘性がでてくる。15～20cm

Ⅳ層　赤褐色ローム層。明赤褐色に酸化変色したローム。5～10cm

Fig. 4　鳥取東原遺跡標準土層図

V 遺構と遺物

Tab. 1 住居址一覧表

番号	位置	規模(m)東西×南北	面積(m²)	壁高(cm)	主軸方向	竈(cm)奥行×中	柱穴(cm)長×短×深さ
H－1	X 6～7, Y10～11	(2.15)×(1.04)	1.79 (未完堀)	17.0	N－82°－E		

注）（ ）内の数値は現存値。

Tab. 2 土坑一覧表

番号	位置	形状	規模(cm)長径×短径×深さ	重複・備考
D － 1	X 4～5, Y10	不整形	150× 75× 17	
D － 2	X 5 , Y10	楕円形	55× 40× 13	
D － 3	X 5～6, Y10	長方形	135× 78× 64	江戸時代の埋葬施設。人骨、磁器小皿、土師質皿型土器、古銭出土。
D － 4	X 8 , Y10	(長方形)?	(151× 67× 15.5)	
D － 5	X10 , Y 9	(楕円形)?	(65× 35× 24)	
D － 6	X22 , Y 8	長方形	113× 75× 23	
D － 7	X23 , Y 8～9	楕円形	63× 36× 24.5	

注）（ ）内の数値は現存値。

Tab. 3 遺物観察表

番号	出土位置	器形	大きさ 口径	大きさ 器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成・整形方法 口縁・胴部	成・整形方法 底部	備考	Fig.
1	H－1	土師坏	(13.6)	—	①中粒②良好③明赤褐④1/2	内斜口縁。横撫で。篦削り。欠損。		内面に放射状暗紋。	10
2	H－1	土師高坏?	(17.4)	—	①細粒②良好③橙④3/4	直立。横撫で。篦削り。	欠損。口縁部外側に鋸歯文を有す。弱い外稜を持つ。		10
3	D－3	土師質皿型	9.2	2.75	①細粒②良好③橙④完形	外傾。轆轤。回転糸切り未調整。			10
4	D－3	磁器小皿	11.0	2.2	①細粒②良好③暗灰④完形	外傾。轆轤。回転篦調整。志野系。陥入有り。16世紀以降			10

注）表の記載は以下の基準で行った。
1 胎土は細粒（0.9mm以下）、中粒（1.0～1.9mm）、粗粒（2.0mm以上）とした。
2 焼成は、極良・良好・不良の3段階。
3 色調は土器外面で観察し、色名は新版標準土色帖（小山・竹原1976）によった。
4 大きさの単位はcmであり、現存値を記載した。

Ⅵ　ま　と　め

赤城山はその裾野を四方に長くひき、山頂部から流れ出る河川によって幾多の開析谷が刻み付けられている。本遺跡地は南北に流れる２本の河川に挟まれた舌状台地の西、藤沢川に接したところに位置する。舌状台地上では水に乏しく、主に桑畑等が広がり、小河川により形成された谷地では、狭隘ではあるが水田が営まれている。本遺跡もこうした谷地や台地周辺部に検出された。そして、この斜面の末端部は比高差10ｍ前後の直線的な段丘崖をなしており、旧利根川のつくった広瀬川低地帯に接している。舌状台地中央部の桑畑では、遺物の少量散布が見られ、本遺跡西の河川近くの畑では濃密散布が見られ住居地の存在が容易に推測された。しかし、実際には住居址１軒と予想に反して少なかったのは、河川により形成された谷地が調査区の半分以上を占めていたためと思われる。やはり、両河川に挟まれた台地のほぼ中央高燥地での集落の主体は台地周縁にあるものと想定してよいであろう。

今回、本遺跡から検出された全遺構は、住居址１軒、土坑７基である。住居址は、竈が検出されなかったのでロームから床面を追っていった結果、住居址であると判明したものであった。遺構面から床面まで10㎝弱と浅く非常に残存状態の悪い竪穴住居であり、南側の大部分が調査区外であったので未完掘に終わったが、弱い外稜と鋸歯文を持つ高坏と、内斜口縁を持つ坏を出土していることから５世紀終末から６世紀初頭の頃の住居だと思われる。また、土坑は埋葬施設の１基以外遺物が全くなく年代、構築意図などは不明である。そこで、今回、本遺跡から検出された１基の埋葬施設について取り上げてみたい。

［なお、以下の所見は東京都港区教育委員会（1988）『増上寺子院群～光学院・貞松院跡、源興院跡～』を参考にしている。］

まず、我が国では古代から葬法には土葬と火葬があると考えられており、土葬には、早桶、方形木棺、甕棺、直葬などの種類が確認されている。早桶は円筒形の木棺あるいは桶を使用したものであり、方形木棺は直方体の形をした木製の棺である。甕棺は人体に合う大きさの甕を棺として用いている。直葬は遺体を棺に入れずに直接土坑に埋葬したものである。火葬とは、遺体を一度焼いてから、あらためて何かの容器などに入れ埋納されるようである。また、特殊な例として、焼かれた歯を陶器に埋納したもの、焼かれた歯と第２頸椎を磁器に埋納したものなど、分骨を行ったと見られる例もある。これらの違いは、地域的なものか、宗教的なものかは、諸事情によるものかは明確ではない。今回検出したものは、錆化が激しく原形をとどめないが棺の蓋を打ち付けたであろう釘が出土していること、地表面を正確な長方形に堀り込んでいること、棺を埋めた後に崩れたであろう状態が断面で見て取れることなどから、方形木棺であろうと推測できる。棺内の埋葬者は、頭部を南に向けてあぐらをかいているような足を組んだ状態で仰向けに葬られたと思われる。骨の状態は、非常にもろく取り上げる段階で崩れてしまった。

確認できた副葬品と思われる物は、磁器小皿１枚、土師質皿型土器１枚、漆と思われる破片数片と古銭18枚であった。磁器小皿は、全体の形状は小型で、口径に比して底径が大きい。器肉が厚く、釉の状況や陥入も粗く、全体としてのつくりは雑である。瓜志野系に属するものとみられる。16世紀後半に出現したものであるが、つくりからみて、それよりやや下る時期のものであろう。土師質皿型土器は、中型の灯明皿で胎土に砂を多量に含み底部は左回転轆轤であった。口径９㎝、器高３㎝以下で体部が内湾する。器肉は厚手で口径と器高の比は５に近く、底部と器高の比は３で、16世紀後半以降としての様相がみてとれる。磁器小皿と土師質皿型土器は、日常雑器として副葬されたもので、被葬者の階級がうかがわれる。漆片は櫛などに塗られるケースが想定されるものの、断定するには小片であった。次に、埋葬時に副葬される銭貨のことについて考えてみたい。

銭貨の種類は、中国、朝鮮などで鋳造され、日本に持ち込まれた渡来銭と日本で鋳造された本邦銭とに分ける

ことができるであろう。中国銭などの外国銭を真似て日本で鋳造された鐚銭、私鋳銭なども存在するだろうが、外国で鋳造されたか、日本で鋳造されたか、厳密な区別が難しいため、今回は、本邦銭以外を全て渡来銭として扱うこととした。

我が国の中世から近世にかけての埋葬施設には銭貨が副葬されている例が多くみられる。最も一般的な副葬の形態は、銭6枚を棺内に収められるもので、これは俗に「三途の川の渡し賃」、「六道銭」と呼ばれている。いつ頃から「六道銭」として意識されていたかは不明である。銭貨を副葬する習俗は奈良時代から見られるものの、鎌倉時代においてもまだ銭の副葬そのものが一般的ではなく、特定の枚数の銭を副葬する風習も確立していないようである。しかし、室町時代に入ると銭を副葬する例が多くなり、室町時代の特に後半あたりに成立した風習と考えられる。さらに、江戸時代にはいると、6枚という数の銭を副葬する例は他の枚数を圧して多くなることから、江戸時代において一般的に広まり隆盛したものと推測できる。

六道銭だから6枚だとは必ずしも限らないようだが、6枚と言う数字が意識されていたことは確かであろう。また、6の倍数である12、18の例もあることから、6枚1組で1セットの六道銭を数箇所に副葬する民俗例もある。本遺跡からは、頭部、頸部、脚部と思われる3カ所から各5、7、6枚と合計18枚出土していて、6の倍数という例に該当するが、上記にある6枚1組の意識からは少しずれている。また、六道銭の出土位置・状況について検討すると、民俗例や他の調査例によれば、六道銭は、死者の頸にかけたりする頭陀袋に入れられたり、手に握らせたり、口にくわえさせたりするらしい。しかし、今回、頭陀袋自体の確認もできなかったし、頭陀袋に入れられた形跡とみられる布痕等も銭に付着していなかった。これら、枚数のばらつきや六道銭を供える位置、頭陀袋の使用等、当時の副葬に関する宗教や風習、地域差などは興味深くまだまだ研究の余地がある。

江戸時代前期から中期の埋葬施設に副葬された六道銭の種類としては、中世以来使用されていた唐銭・宋銭・明銭などを中心として渡来銭ないしはそれらの私鋳銭とみられる鐚銭（びた銭）と、寛永13（1636）年に幕府公式の鋳造が開始された古寛永通宝、寛文8（1668）年から鋳造され背面に「文」の字を有するいわゆる「文銭」、「文」の字を持たない初鋳元禄10（1697）年の新寛永通宝などが主要な銭貨であるようだ。今回出土した18枚を種類別にすると、開元通宝1枚、古寛永通宝8枚、文銭8枚、新寛永通宝1枚である。なかでも、開元通宝は中国唐代武徳4（621）年初鋳のものであり、その後、会昌5（845）年中国各地の鋳銭所で統一規格による背面に「昌」の字を有する會昌開元を鋳造し、ついで南唐の即位4（966）年、また高麗の裨宗5（998）年にも公鋳されたものであり、各開元通宝は中・近世まで使用されたことが備蓄銭の中に含まれていることから知れる。今回出土した開元通宝を、各年の銭と外径・内径・重さ・字形で比較してみた結果、南唐の即位4（966）年鋳造の銭に最も類似することがわかった。また、頭部、頸部、脚部の3カ所の内訳けでは、頭部に（開元通宝1・古寛永通宝2・文銭2）5枚、頸部に（古寛永通宝2・文銭4・新寛永通宝1）7枚、脚部に（古寛永通宝4・文銭2）6枚であった。このことから、埋葬した者は、古銭の種類を考えて副葬したとは考えにくい。なぜなら、古銭の種類・組み合わせがそれぞれ異なるからだ。

この埋葬施設の年代については、最も後出の新寛永通宝が1697年であることから少なくともそれ以降だということがわかる。しかも、銭種別にみると古寛永通宝と文銭の割合が高く、新寛永通宝が少ないことから、新寛永通宝の流通がまだ不十分な時期だとも考えられる。このことから、1697年以降、あまり隔たらない時期で18世紀前半の埋葬施設である可能性を指摘しておきたい。

本遺跡から埋葬施設は1基しか検出していない。過去、現地に寺や墓地などが存在した記録が地元の歴史になく、地元住民の過去帳などにも過去において現地に埋葬された記録もない。したがって、当地域のその他の埋葬施設と比較研究することができないが、近世の時代の葬送儀礼に関する資料を提供してくれた。今後、新たに実施される調査結果を踏まえ研究していくことにより、本遺跡と周辺遺跡との関連、さらには、慣習・風習などもより一層明確になり、この地域の歴史と民俗性が解明されることを期待します。

《参　考　文　献》

東京都港区教育委員会	（１９８８）	『増上寺子院群～光学院・貞松院跡、源興院跡～』
岩手県埋蔵文化財センター	（１９８３）	『発掘された墳墓について』　紀要　Ⅲ　所収
魚津市教育委員会	（１９８１）	『富山県魚津市　印田近世墓～発掘調査報告～』
前橋市教育委員会	（昭和58年度）	『端気遺跡群Ⅱ』
尾　形　禮　正	（昭和61年）	『考古学ライブラリー・45』「出土渡来銭の観察」
尾　形　禮　正	（昭和56年）	『歴史公論・66』「歴史資料としての発掘銭」

X−45
Y 20
X−45
Y−10
I区
H区
G区
X−5
Y−10
F区
X5
Y20
X5
Y0
X 5
Y−10
E区
C区
D区
B区
X35
Y10
X 35
Y−10
A区
0
120m

Fig. 5　調査区全体図

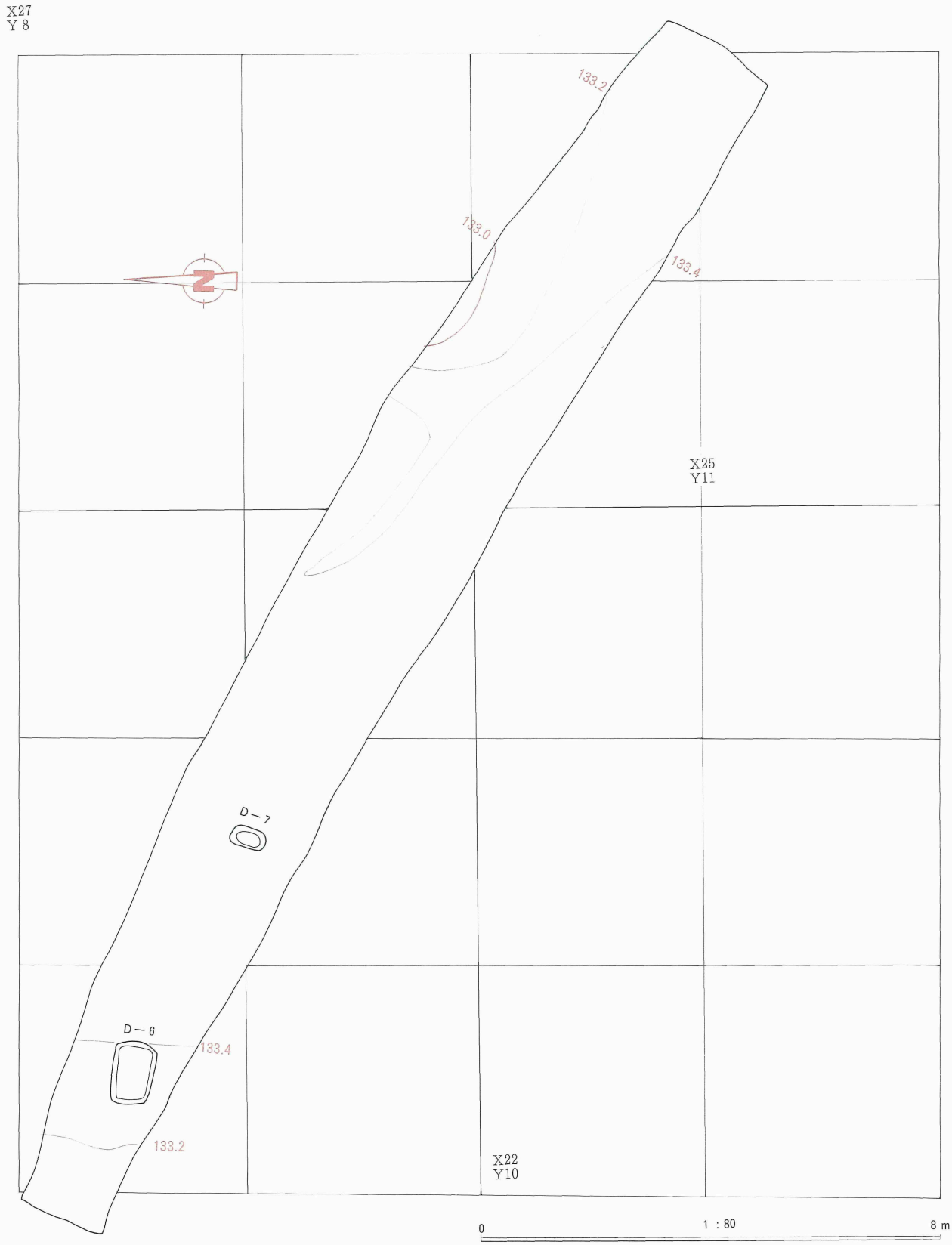


Fig. 6　調査区Ｃ区

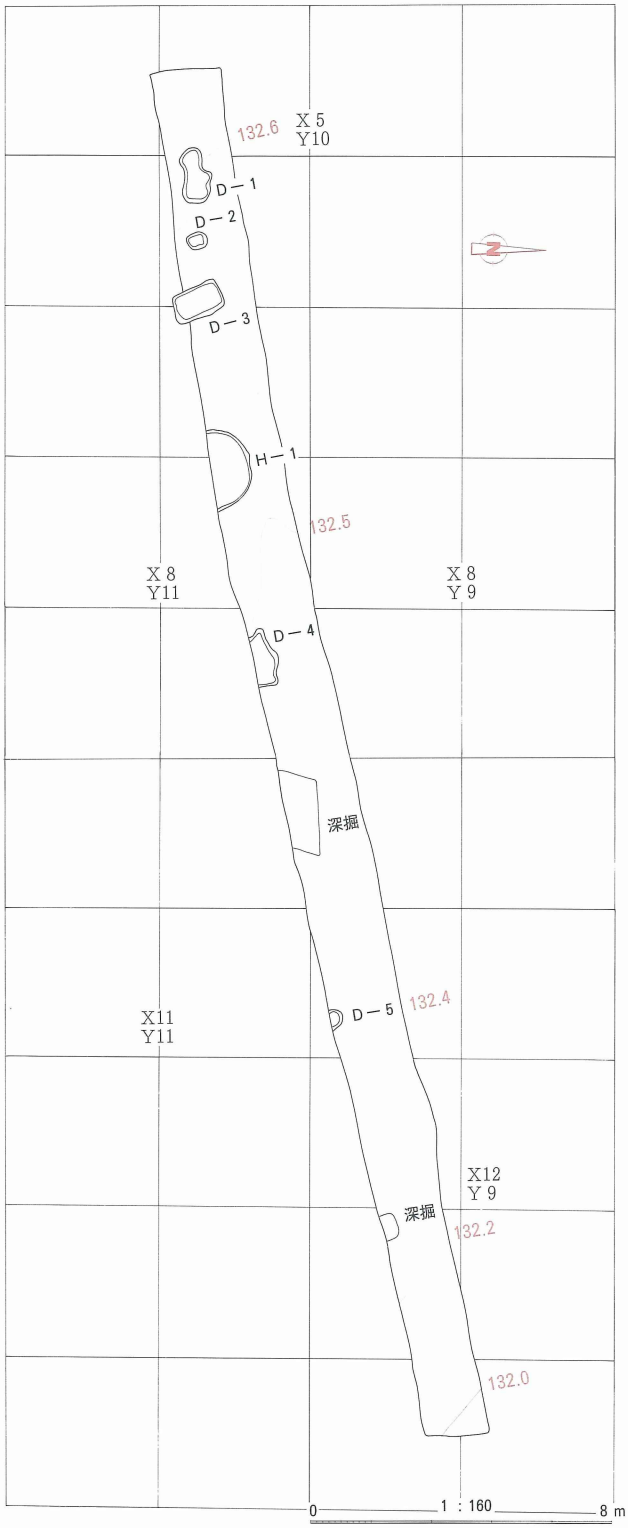
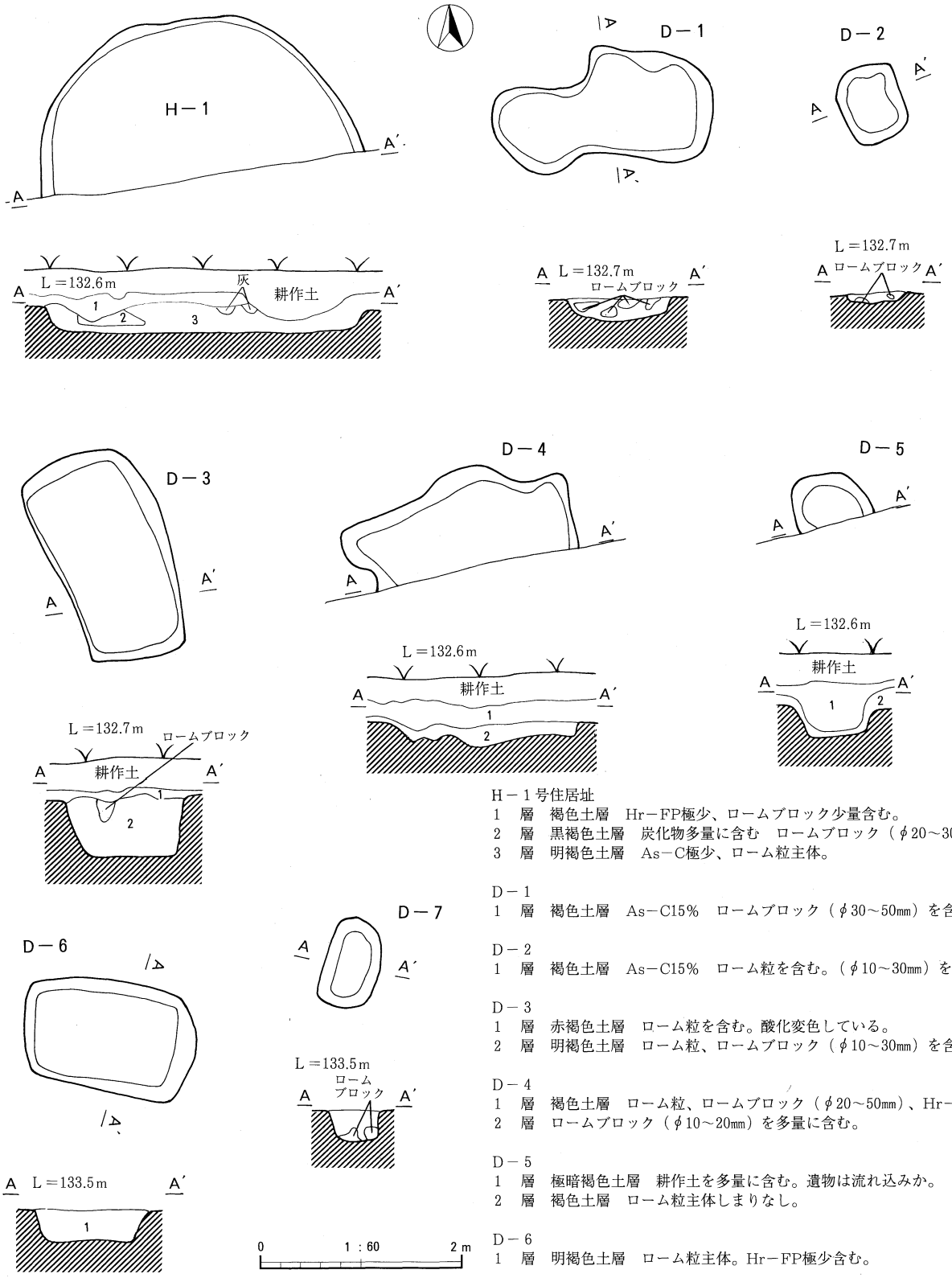

132.6
X 5
Y10
D－1
D－2
D－3
H－1
132.5
X 8
Y11
X 8
Y 9
D－4
深掘
D－5
132.4
X11
Y11
X12
Y 9
深掘
132.2
132.0
0
1 : 160
8 m

Fig. 7　調査区Ｆ区



H－1号住居址
1　層　褐色土層　Hr－FP極少、ロームブロック少量含む。
2　層　黒褐色土層　炭化物多量に含む　ロームブロック（φ20～30㎜）
3　層　明褐色土層　As－C極少、ローム粒主体。

D－1
1　層　褐色土層　As－C15％　ロームブロック（φ30～50㎜）を含む。

D－2
1　層　褐色土層　As－C15％　ローム粒を含む。（φ10～30㎜）を含む。

D－3
1　層　赤褐色土層　ローム粒を含む。酸化変色している。
2　層　明褐色土層　ローム粒、ロームブロック（φ10～30㎜）を含む。

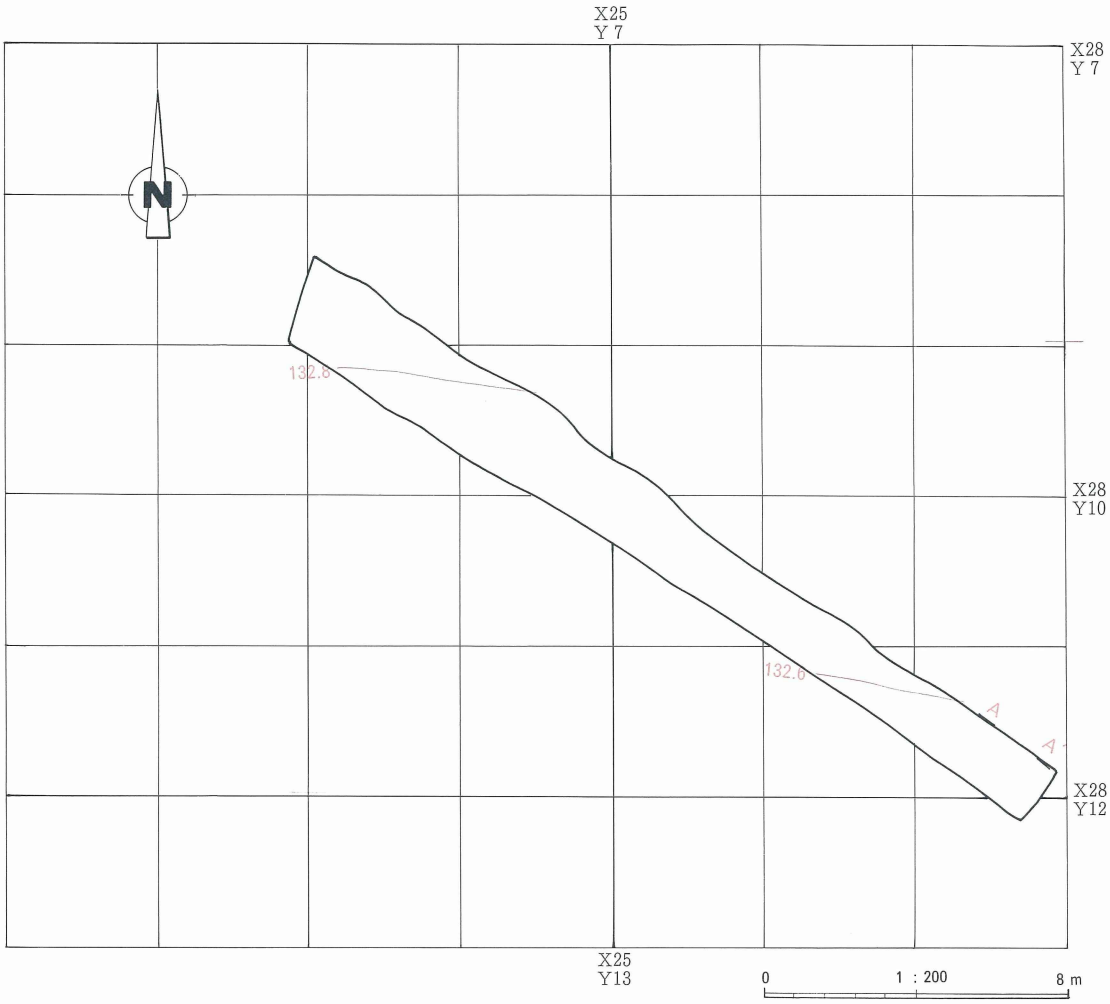
D－4
1　層　褐色土層　ローム粒、ロームブロック（φ20～50㎜）、Hr－FP極少含む。
2　層　ロームブロック（φ10～20㎜）を多量に含む。

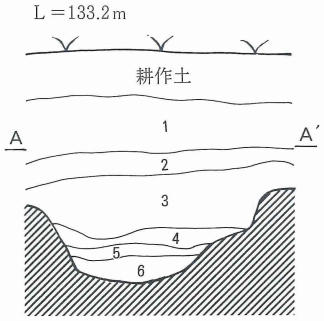
D－5
1　層　極暗褐色土層　耕作土を多量に含む。遺物は流れ込みか。
2　層　褐色土層　ローム粒主体しまりなし。

D－6
1　層　明褐色土層　ローム粒主体。Hr－FP極少含む。

D－7
1　層　暗褐色土層　ローム粒主体。Hr－FP極少含む。

Fig. 8　H－1・土坑





B区　深掘セクション
1　層　褐色土層　Hr－FP10%　As－C５%含む。耕作土も交じる。
2　層　褐色土層　As－C40%　Hr－FP極少含む。
3　層　暗褐色土層　川砂主体　しまりない粗砂層。
4　層　褐灰色土層　川砂利純層。
5　層　極暗褐色土層　粘性が非常に強い微砂層。
6　層　暗褐色土層　粘性を有す微砂層。水が湧水。

0　1 : 60　2 m

Fig. 9　B区・土層図

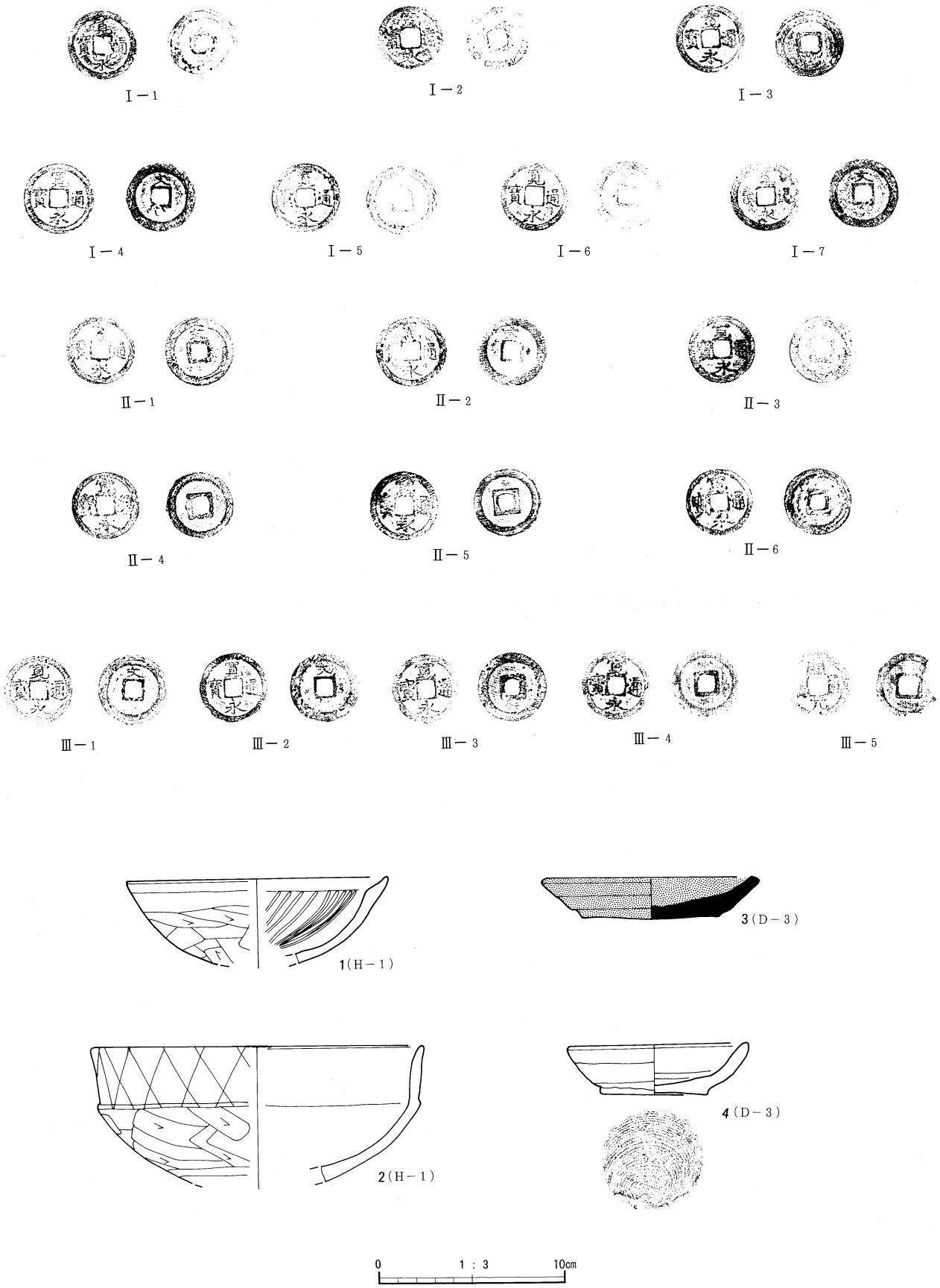
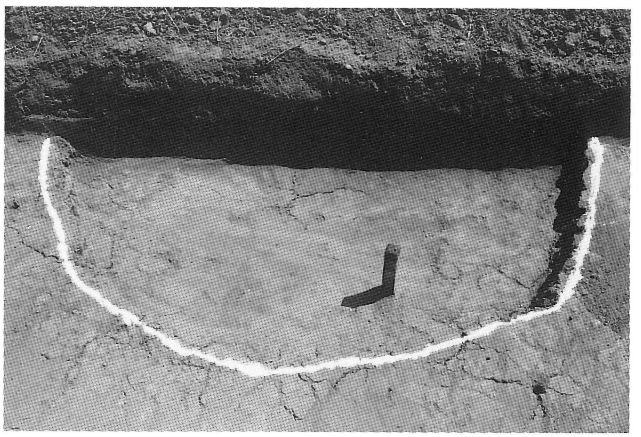


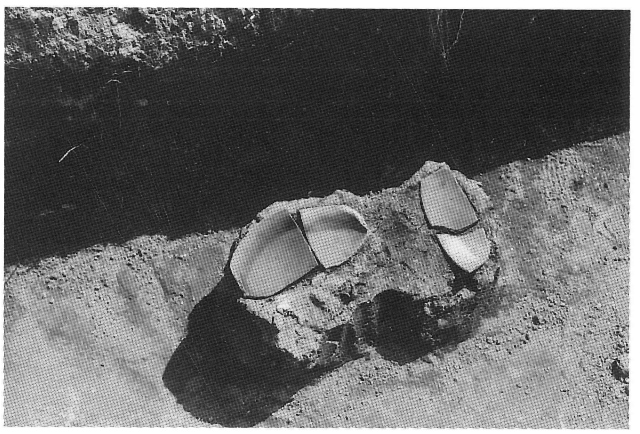
Fig. 10　D－3土坑・H－1号住居址出土の古銭・土器

F区　深掘り（北から）



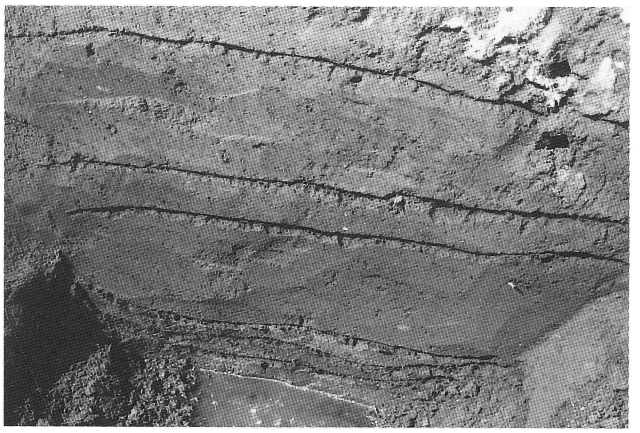
H－1　全景（北から）

H－1　遺物出土状態



H－1　遺物出土状態（北東から）

B区　全景（西から）



B区　深掘り（南から）

D区　全景（東から）

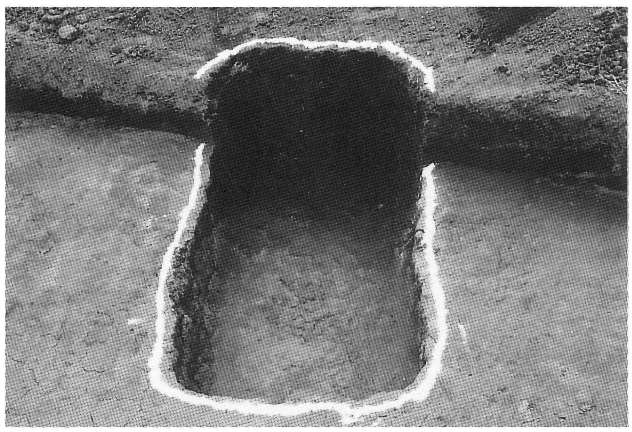
E区　全景（東から）

調査前全景（西から）

調査前全景（東から）

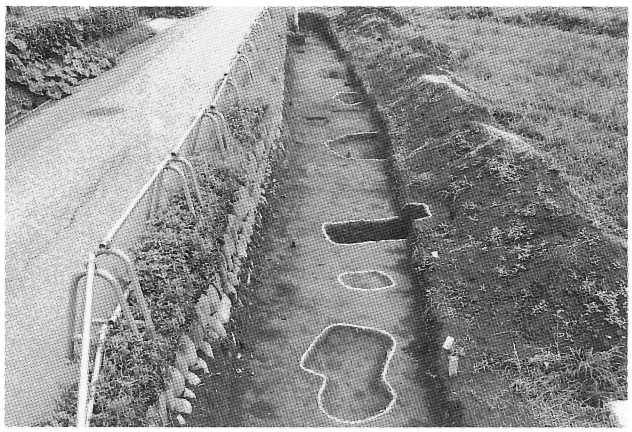
D－3　遺物出土状態（北から）

D－3　セクション（北から）



D－3（北から）

D－3（東から）



F区（西から）

F区（東から）

抄　　録

フリガナ	トットリヒガシハライセキ
書名	鳥取東原遺跡
副書名	鳥取町現道拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	坂口　好孝　　真塩　明男
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒371-0007　群馬県前橋市上泉町664－4
発行年月日	西暦1998年３月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
トットリヒガシハラ 鳥取東原	マエバシシトットリマチ 前橋市鳥取町	10201	9C15	36°24′46″	139°06′36″	19970710 19980331	690m²	鳥取町 現道拡幅工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特別事項
鳥取東原	埋葬施設	江戸時代	埋葬施設１基	開元通宝１枚、寛永通宝17枚	

鳥取東原遺跡

平成10年３月24日　印刷
平成10年３月31日　発行
編集発行　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市上泉町664－4
TEL　027－231－9531